

日语 程度副词研究

日本語の程度副詞の研究

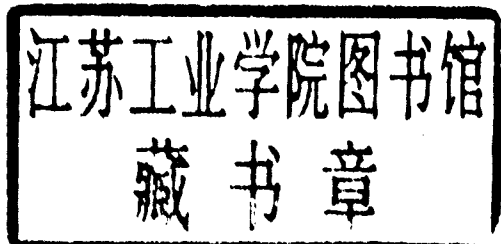
赵宏 著



大连理工大学出版社

日本語の程度副詞の研究

日语程度副词研究



赵 宏 著

大连理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日语程度副词研究 / 赵宏著. —大连:大连理工大学出版社, 2007. 1

ISBN 978-7-5611-3443-6

I. 日… II. 赵… III. 日语—副词—研究
IV. H364. 2

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2006) 第 162518 号

大连理工大学出版社出版

地址:大连市软件园路 80 号 邮政编码:116023

发行:0411-84708842 邮购:0411-84703636 传真:0411-84701466

E-mail: dulp@ dulp. cn URL: <http://www. dulp. cn>

大连日升印刷有限公司印刷 大连理工大学出版社发行

幅面尺寸:140mm×203mm 印张:10.625 字数:263 千字

印数:1~3000

2007 年 1 月第 1 版

2007 年 1 月第 1 次印刷

责任编辑:王佳玉 宋锦绣

责任校对:萧 音

封面设计:孙宝福

定 价:30.00 元

序

言語の使用は現生人類(ホモ・サピエンス)に共通する種特有の能力であり、文化の基である。しかも、たかだか二十万年を越えぬとされるホモ・サピエンスの地表拡散の間に、何千という種類の言語が変異発生し、消滅もしてきたと目される。母語というかたちでの個々の言語獲得に遺伝的要素と環境的要素がかかわることに疑いの余地はない。一方、一見異なる諸々の言語は、ホモ・サピエンス共通の本質的基盤(発声器官、聴覚、脳神経体系など)の上に偶発的要因が重なって発生・変異し、長いタイムスパンと社会文化史的蓄積を経て、かつは変貌しかつは相互に作用しあいつつ今日に至った、現象形態といえよう。それゆえにこそ我々は母語を「獲得」し外語(いま母語以外のものを仮にこう呼んでおく)を「学習」しうるのである。それゆえにまた我々は、国家や民族といった、有意であるとともに互いを隔てもする社会観念に徒にとらわれることなく、より根源的な人類の視野に立って異なる言語現象を理解し尊重しあうべきであろう。言語の研究と教育はその意味で尊く大切である。趙宏女史が多年の日本語研究の成果を博士論文として上梓するに至ったことはその佳き一例であり、また日本語を母語とする者として率直に嬉しい。

一衣帯水というが、1万数千年を遡れば、ユーラシア大陸と日本列島は陸続きであり、さらにはベーリング地峡を通じてアメリカ大陸とも地はつながっていた。しかし意思疎通手段とし

II

での音声言語はいかなる条件の重なりによってか種々異なる発展をとげ、現代の言語学では Sino-Tibetan が一大語族をなすとみなされているのに対し、Japanese は琉球語以外に係累のない孤立した言語とされている。孤立といえ、形態的類型として屈折語である印欧諸語に対し、シナ・チベット諸語は孤立語とされ、またニホン語は膠着語と呼ばれ、音声面でも明らかに近隣諸語とは異なっている。しかし文字に着目すれば、アルファベット文化圏が古代フェニキアやギリシャの文字文化から発展したと類似の関係が漢字と日本語の間にもみられる。すなわち日本語は、殷周秦漢各代を経て成熟した漢字文化を魏晉南北朝から隋に至る間に積極的に受容し、日本語の特性に適う仮名文字を加えて、漢字かな併用の独自文字文化を発展させたが、大きく漢字文化圏と通称されるグループに属している。縦横自在に記述が可能であることはアルファベットやアラビア文字にない特徴であり、我々は漢字発祥の地に深い敬愛の念を抱くとともに、インドに発しアラビアを経て広まったとされる算用数字ともども、これらの恩恵を自由に享受するホモ・サピエンスの一員であることをあらためて感謝するのである。

「鵬背幾千里」といい「白髪三千丈」という。中国古典を多少学んだ者はレトリックとしての誇張表現は漢文の面目躍如たるものと思い、従って一というのは短絡であるが一「程度の甚だしき」を表わす表現は現代中国語にもあふれるごとく豊富であろう、と思ひ込みがちである。ところが然に非ず、現代日本語こそ「甚だしきを表わす程度副詞」が多く驚かされた、という趙宏女史の着眼、研究の発端には意外性のおもしろさがあった。一般に日本語関係の外国人若手研究者のテーマには幾つかのパターンがある。曰く、日本語における敬語体系ないし待遇表現、曰く、近代化過程の日本語・日本文学、曰く、何某語と日本語の比

序 III

較研究、等等。ヨーロッパ系の場合はこれに加えて、擬音語や擬態語とされる表現への強い関心もあり、アジア系の場合は自国の言語社会状況に関する研究をわざわざ日本で行ない、日本語がいわば表現手段として利用される例もまみられる。いずれにしても趙宏女史の発想はこれらのパターンと無縁な独自のものであり、もって奇とし貴とするに足りよう。加うるに初手によき助言者と資料を得て、明治20年代(19世紀末)の膨大な準口語資料(速記録)の分析に没頭し、資料処理のコツと持続する強靱な意思を磨いている。一橋大学大学院言語社会研究科に受理された博士論文は、この基礎のうえに立って、9世紀から20世紀までの日本文学にみられる「甚だしさを表わす程度副詞」について、方法論上の検討をふまえ会話文とみなされる部分に焦点をしぼり、出現例を記述統計的に処理し図示した、「甚だ」貴重な通時的研究の成果である。もってその労を多とし、その公刊を慶賀し、日本語母語話者として謝意を表する次第である。

2005年11月

新井 皓 士

前書き

本書は、2004年10月25日に一橋大学に提出し、2005年3月28日付けで課程博士(学術)の学位を受けた学位論文「日本語の会話文における「甚だしさを意味する」程度副詞—中古から近代に至る展開—」を加筆修正したものです。

本書は、日本語文法において程度副詞に分類されるもののうち、特に「甚だしさ」を表わす語彙に着目、文献上この種の語彙が通常最も出現しやすい会話文に分析対象をしぼり、中古(平安時代)から近代(太平洋戦争末期まで)に至る文献資料を極力網羅的に調査して、その通時的変遷の実態を記述統計的に整理する一方、動詞や形容詞などとの共起関係を分析し、豊富な日本語の「甚だしさ」を意味する程度副詞を、包括的に把握しようとする試みです。

本書は6章から成り立っており、序章は研究の目的、課題設定の理由、副詞及び程度副詞の位置付け、時代区分、研究方法、上代の時代概観及び文献資料を中心に上げます。第1章以下、第4章に至るまで、調査・分析方法と叙述スタイルは一貫しています。第1章は中古、第2章は中世、第3章は近世、第4章は近代の会話文における程度副詞(以下において、「程度副詞」とは、「甚だしさを意味する」程度副詞の意)の使用状況及び文法機能について記述、分析します。終章は程度副詞の通時的な考察結果と今後の課題を扱います。

本書によって、程度副詞の変化の諸事実、文法機能を知ってい

VI

ただくことができれば幸いです。また、本書が日本語学に携わっている人やそれを目指している人にとっていささかでも役に立てば幸いです。ただ、まだまだ不適切なところや足りないところ、あるいはわかりにくいところがあることを恐れています。読まれた方から、いろいろとご教示を頂きたいと思っています。

本稿作成の際、恩師の一橋大学の新井皓士教授から懇切なる御指導と御教示を終始たまわったことに対して、心から厚くお礼申し上げます。日頃から日本語学に関する情報を提供してくださったり、多角的な見方をご教示くださったりして大いに励まされました。先生の厳しくて温かい御指導がなければ、この論文は完成しなかったでしょう。そして、貴重なコメントを与えてくださった一橋大学の秋谷治教授、坂井洋史教授にも衷心より謝意を申し上げます。また、論文の日本語を丹念にチェックし、助言をたくさん与えてくださった新井ゼミの新川信洋さんにも深く感謝申し上げます。

本書出版に当たっては、大連理工大学出版社及び王佳玉氏、宋錦綉氏にいろいろとお世話いただきました。また、大連外国語学院の陳岩教授、劉利国教授にも温かい励ましをいただきました。これらの方々に御礼申し上げます。

最後に私事で恐縮ですが、本書を、この研究を理解、支持し、長年の海外生活を許してくれた家族に捧げます。

2006 年 7 月

趙 宏

目 次

序	I
前書き	V
序章	1
第1節 研究の目的及び課題設定の理由	1
第2節 副詞及び程度副詞の位置付け	6
第3節 時代区分	13
第4節 研究方法	15
第5節 上代の時代概観及び文献資料	20
第1章 中古の会話文における程度副詞	25
第1節 中古の時代概観及び使用する文献資料	25
第2節 物語(及び日記随筆・説話集)の会話文における 程度副詞の使用状況	32
2.1 物語	33
2.2 日記・随筆	44
2.3 説話集『今昔物語集』	46
2.4 総括	51
第3節 程度副詞の文法機能	60
3.1 いと	61
3.2 いみじく(う)	77
3.3 いたく(う)	83
3.4 きはめて	86
3.5 あまり	89

3.6	使用数が少ない程度副詞	92
第2章	中世の会話文における程度副詞	96
第1節	中世の時代概観及び使用する文献資料	96
第2節	物語(及び説話・日記随筆・お伽草子・狂言・キリシタン口語資料)の会話文における程度副詞の使用状況	103
2.1	鎌倉時代の物語	103
2.2	説話集	108
2.3	日記・随筆	111
2.4	室町時代の物語	114
2.5	お伽草子	118
2.6	狂言	120
2.7	キリシタン口語資料	121
2.8	総括	124
第3節	程度副詞の文法機能	130
3.1	いと	130
3.2	あまりに	135
3.3	おほき(い)に	138
3.4	あまり	140
3.5	使用数が少ない程度副詞	142
第3章	近世の会話文における程度副詞	147
第1節	近世の時代概観及び使用する文献資料	147
第2節	小説(及び浄瑠璃・歌舞伎脚本)の会話文における程度副詞の使用状況	154
2.1	前期小説	155
2.2	浄瑠璃	159
2.3	後期小説	161
2.4	歌舞伎脚本	171

目 次 IX

2.5 総括	174
第3節 程度副詞の文法機能	180
3.1 いと	181
3.2 あ(ん)まり	185
3.3 おほき(い)に	189
3.4 いたく(う)	191
3.5 ずいぶん	193
3.6 使用数が少ない程度副詞	196
第4章 近代の会話文における程度副詞	200
第1節 近代の時代概観及び使用する文献資料	200
第2節 小説の会話文における程度副詞の使用状況	212
第3節 程度副詞の文法機能	237
3.1 ずいぶん	238
3.2 あ(ん)まり	242
3.3 たいへん	246
3.4 よほ(つぽ)ど	249
3.5 なかなか	253
3.6 おほき(い)に	256
3.7 ひじょうに	258
3.8 たいそう	261
3.9 ひどく	264
3.10 はなはだ	266
3.11 使用数が少ない程度副詞	268
終章 程度副詞の通時的な考察と今後の課題	272
主要参考文献目録	310
索引	320

序 章

第 1 節 研究の目的及び課題設定の理由

本論文の目的は、日本の中古から近代にかけての主要な文献資料中の会話文における、「甚だしさを意味する」程度副詞の一群を取り上げ、これらが各時代に呈した様相を記述・分析し、その移り変わりの過程を実証的に明らかにすることにある。

「甚だしさを意味する」程度副詞が日本語において豊富であるということは中国語を母語とする日本語学習者にとっては驚きであるし、その存在が日本語の一つの特徴とさえなっているように感じられる。現代語に限って各辞書^[1]をざっと見渡しても、「あまり」「いやに」「うんと」「えらく」「おおいに」「おそろしく」「かなり」「きわめて」「ごく」「ごくごく」「しごく」「ずいぶん」「すごく」「すこぶる」「ぜんぜん」「そうとう」「たいそう」「たいへん」「とても」「なかなか」「ばかに」「はなはだ」「ひじょうに」「ひどく」「べらぼうに」「めつぼう」「よほど」などが挙げられる。これに対し、現代中国語^[2]では、“大”“大大”“顶”“非常”“过”“很”“极”“极度”“极端”“极其”“老”“颇”“甚”“十分”“太”“相当”などが挙げられるものの、その数は少ない。

日本語には「甚だしさを意味する」程度副詞がこれほどに多く見られるわけだが、現代日本語の「甚だしさを意味する」程度副詞に関わる文法については、すでに森田良行^[3]、渡辺実^[4]、飛

田良文・浅田秀子^[5]、仁田義雄^[6]などの研究成果があり、その意味用法が解明されてきている。しかし、「甚だしさを意味する」程度副詞が歴史的にどのような変遷をとげてきたのかという問題については、国語史の立場から体系的な研究が十分に行われているとは言い難いように思われる^[7]。この問題は、近代までの個々の「甚だしさを意味する」程度副詞に関してその来歴を網羅的に記述することと、「甚だしさを意味する」程度副詞の全般的推移に関して包括的に考察を加えることに大別されるように思われる。前者は、各語が歴史上のある時期においてどの程度使われ、どんな文法機能をもっていたのか、そしてそれには何らかの変化が見られるのか、見られるとすればどのような過程となるのか、といった諸問題を含む。そして、後者は、直接には「甚だしさを意味する」程度副詞の発生及び消長盛衰に関わる。すなわち、ある時代になって言いはじめられた語があるのか、各時代で盛んに用いられた特徴的な語が見られるのか、ある時代に「甚だしさを意味する」程度副詞として用いられた語の中に姿を消していったものはあるのか、といった問題である。

周知のように、言葉は固定されたものではなく、常に流動するものであり、過去に記録をもつか否かにかかわらず、人間の歴史とともに言葉は変化してきたと考えられる。言葉はそれぞれの社会やその文化を敏感に反映して、消長盛衰が激しい。流星のように瞬間的に輝き出て、また消えて行った言葉もあるし、時の流れの中で長い生命を保っている言葉もある。例として副詞について考えてみると、『国語史辞典』の「副詞」の項^[8]によれば、日本語における副詞は、『日本国語大辞典』^[9]には6000語弱が登録されているのに、現代語については、『現代雑誌九十種の用語字』^[10]に1000語余りが登録されているにすぎない。これに関して、同項目の執筆者京極興一は、「この二つの数からする

と、古代から現代まで相当数の副詞が消えあるいは生じた、すなわかなり激しい盛衰のあったことが知られるのである」と述べている。

京極説のように、総合的な『日本国語大辞典』と特殊な調査対象を扱う『現代雑誌九十種の用語用字』を取り上げ、単純に比較するということが本当に妥当かどうかについては、ここでは立ち入って論じることはできない。しかし、時代とともに語が少しずつ入れ替わっていくことは事実である。「甚だしさを意味する」程度副詞にも同様の現象が見られる。例えば、現在では日常会話であまり使われないが年配者の会話などに見られる「たいそう」が、明治 20 年代には、庶民の日常語として、くつろいだ場面で幅広く人々に用いられていたことが筆者^[11]の調査によって明らかにされている。また、松井栄一^[12]は、「昭和 20 年代には『全然いかす』『全然すばらしい』など『全然』という語で、程度の甚だしさを表現することが流行した。これが下火になると、次には『すごく』『すっごく』がとってかわった」と述べている。さらに、21 世紀の現在、若者たちの会話の中で物事の程度の甚だしさを表す場合に「チョーむかつく」などの「チョー」や、「メッチャかっこういい」などの「メッチャ」といった言葉が用いられるのをしばしば耳にする。

こうした事実もふまえ、本論文は各時期に見られる「甚だしさを意味する」程度副詞の様相、主に使用状況、文法機能について、言語史的立場から観察し、記述的、かつ極力網羅的に考察を加え、この一群の語の在り方を明らかにしようと思う。これら一語一語の在り方、この一群の語の全般的推移などをすこしでも明らかにすることによって、日本語を母語としない日本語学習者の程度副詞に対する認識を深めることもできるだろうし、言語史的展開の背景事象の考察にもつながりうる。加えて、

「甚だしさを意味する」程度副詞の様相に関する通史的研究がほとんどなされていない現今、この分野の調査研究には少なからぬ意義があるように思われる。

なお、会話文に焦点をあてていく理由については、研究方法と不可分に関わるものと考えられるので、それを扱う本章第4節において言及することとする。

【注】

[1]以下の辞書を参照した。

『旺文社国語辞典』(松村明・山口明穂・和田利政編 1986 改訂新版 旺文社)

『学研国語大辞典』(金田一春彦・池田弥三郎編 1988 第2版 学習研究社)

『基礎日本語辞典』(森田良行著 1989 角川書店)

『新明解国語辞典』(金田一京助〔ほか〕編 山田忠雄主幹 1997 第5版 三省堂)

『広辞苑』(新村出編 1998 第5版 岩波書店)

『大辞林』(松村明編 1999 第2版 三省堂)

『岩波国語辞典』(西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編 2000 第6版 岩波書店)

『集英社国語辞典』(森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一編集委員 2000 第2版 集英社)

『三省堂国語辞典』(見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田武編 2001 第5版 三省堂)

『例解新国語辞典』(林四郎編修代表 2002 第6版 三省堂)

[2]次の辞書を参照した。

『現代汉语词典试用本』(中国科学院语言研究所词典编辑室编 1973 商务印书馆)

『现代汉语虚词例释』(北京大学中文系 1955・1957 级语言班编 1982 商务印书馆)

- 《現代汉语八百詞》(呂淑湘主編 1984 商務印書館)
- 《現代汉语虛詞用法小詞典》(王自強主編 1984 上海辭書出版社)
- 《辭海》(夏征農主編 1986 上海辭書出版社)
- 『岩波中國語辭典』(倉石武四郎著 1990 簡體字版 岩波書店)
- 『中國語大辭典』(大東文化大學中國語大辭典編纂室 主幹香坂順一 1994 角川書店)
- [3] 森田良行 1989『基礎日本語辭典』角川書店
- [4] 渡辺実 1990「程度副詞の体系」『上智大學國文學論集』23
- [5] 飛田良文・浅田秀子 1994『現代副詞用法辭典』東京堂
- [6] 仁田義雄 2002『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- [7] 「甚だしさを意味する」程度副詞について、國語史の立場からなされた体系的な先行研究については、管見の及ぶかぎり、松井栄一が挙げられるのみである。松井は「近代口語文における程度副詞の消長—程度の甚だしさを表わす場合—」(『松村明教授還暦記念國語學と國語史』1977 明治書院)で程度の甚だしさを表す表現である程度副詞の明治元年からの消長を、小説を資料にして調査した(地の文を含む)。その調査の結果、松井は「甚だ」「大いに」「ごく」「極めて」「至極」「頗る」「大層」「非常に」「大変」「ひどく」が「近代口語文で最も代表的な、程度の甚だしさを表す副詞表現である」という結論に達している(748 頁)。膨大な資料を使った全数調査を通して、明治時代からの程度副詞の使用傾向がわかってきた。本論文も松井の研究から学ぶところが多いが、この研究に依拠するだけでは、近代以前の會話文における程度副詞の使用状況などは把握できない。また、松井の研究では程度副詞の具体的な様相、各程度副詞の一つひとつの意味機能、文法的な共起関係などはあまり言及されていない。
- [8] 林巨樹・池上秋彦編 1979 東京堂 304 頁
- [9] 日本大辭典刊行會編 1976 小学館
- [10] 国立國語研究所編 1962-1964 秀英出版
- [11] 趙宏 2003「明治二十年代の速記資料における程度副詞の文体的特徴をめぐって」『学会國語國文學』第 35 号
- [12] 松井栄一 1977「近代口語文における程度副詞の消長—程度の甚だし

さを表わす場合—」「松村明教授還暦記念国語学と国語史」明治書院 738 頁

第2節 副詞及び程度副詞の位置付け

副詞の概念規定及びそれに含まれる語の認定などには種々の問題があり、これまでも言語学者によってさまざまな角度から論じられているが、まだ完全には統一されていないようである。副詞の一種である程度副詞を研究する以上、そもそも副詞とは何かという問題は避けられない。本論文は副詞のカテゴリー・定義などを直接研究目的とするものではないので、ここで副詞の定義・下位分類に関する先学の代表的な研究成果などを簡単に素描するにとどめたい。

日本語の品詞分類を初めて試みたのは、富士谷成章である。富士谷成章は「挿頭抄」^[1]で、語を「名(体言)」「挿頭(代名詞・副詞・感動詞・接続詞・接頭語)」「装(用言)」「脚結(助詞・助動詞・補助用言・接尾語)」に4分類した。副詞は「挿頭」の一つとされたわけである。

『日本文法大辞典』と『国語学大辞典』^[2]によると、富士谷成章のほかに、副詞に類する語が、「姉小路式」(室町時代初期)で「魂を入れるべきてにをは」とされたことがあった。さらに梅井道敏(1770)は「てには綱引綱」で、副詞を「詞」の一類としたし、鈴木朧(1821)は「言語四種論」で「詞に先たつてにをは」、鶴峯戊申(1833)は「語学新書」で「形容言^{さまことば}」、東条義門(1851)は「玉緒繰分」で「体言」の一類であるとそれぞれ規定している。「副詞」という名称はオランダ文典の *Bijwoorden* や英文典の *adverb* の訳語で、オランダ文典に準拠した羽栗洋斎の「教諭新法」(1814)に用いている例が初見と見られ、明治初年から文法書に「副詞」の名